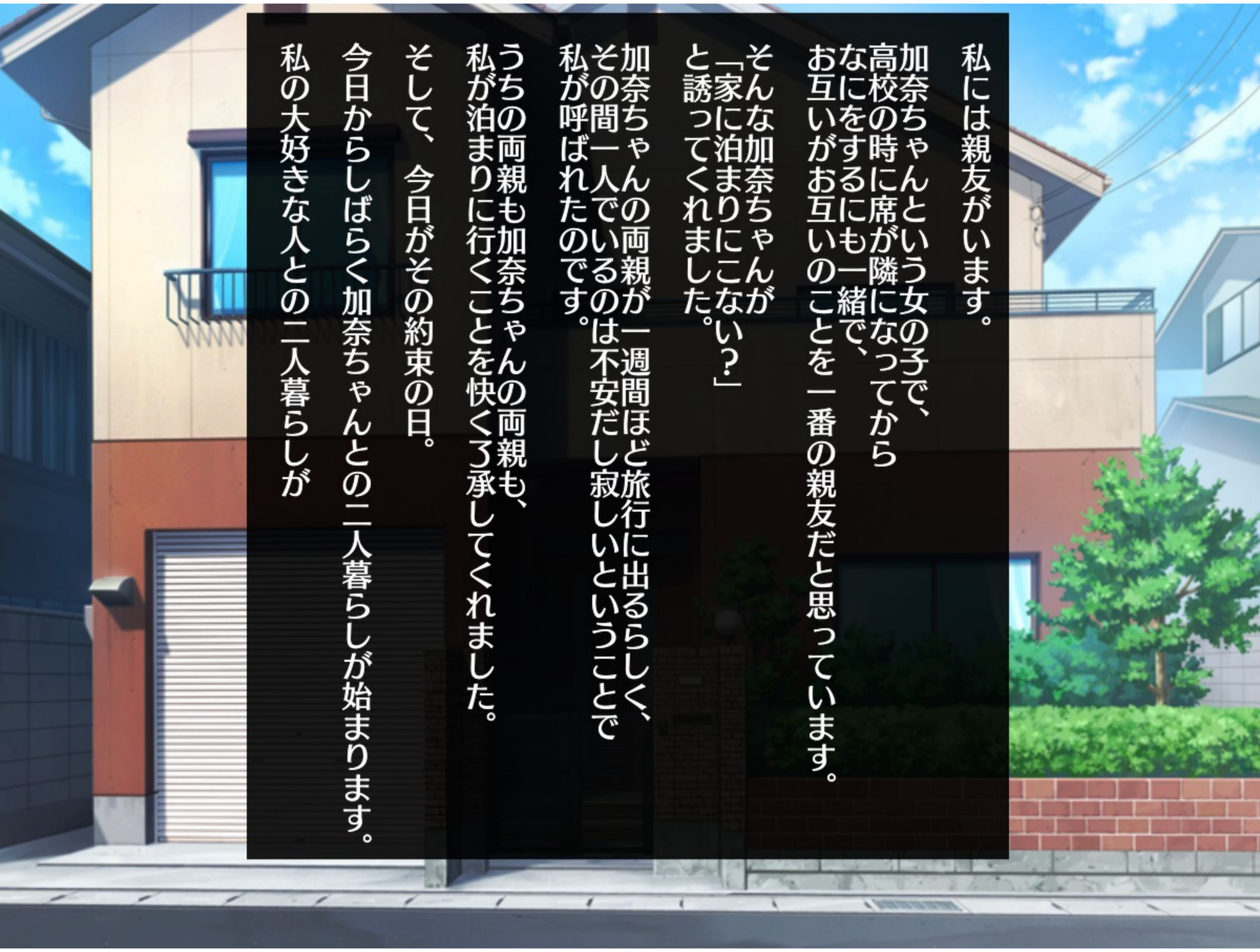
大好きな親友(♀)が
私のクリチ○ポケース
になった日
基本CG6枚
文字あり+文字無し 合計100枚


私には親友がいます。
加奈ちゃんという女の子で、
高校の時に席が隣になってから
なにをするにも一緒で、
お互いがお互いのことを一番の親友だと思っています。
そんな加奈ちゃんが
「家に泊まりにこない？」
と誘ってくれました。
加奈ちゃんの両親が一週間ほど旅行に出るらしく、
その間一人でいるのは不安だし寂しいということで
私が呼ばれたのです。
うちの両親も加奈ちゃんの両親も、
私が泊まりに行くことを快く了承してくれました。
そして、今日がその約束の日。
今日からしばらく加奈ちゃんとの二人暮らしが始まります。
私の大好きな人との二人暮らしが

あ、理央、いらっしゃい
迷わず来れた？
うん、加奈ちゃんの家すごい立派でびっくりしちゃった
えー、そんなことないよ
さ、部屋に行こ？
お菓子とかもいっぱい用意してあるからさ、
ほんとに理央が来てくれてよかった
一人っきりで一週間なんて絶対耐えられなかったよ
あはは

加奈ちゃんはいつもとまったく変わらない様子で
私を迎え入れてくれました。
入ったことのない家で、
しかも加奈ちゃんと二人っきりというので
少し緊張していた私は、
少しだけ拍子抜けした気分になります。
ですがその後はいつも通り二人で話をしたり、
ゲームで遊んだりして
あっという間に時間は過ぎていきました。
そして、二人で最初のご飯を食べ終えてゆったりした頃、
私は自分の荷物から水筒を取り出して
加奈ちゃんに見せました。

ねえ加奈ちゃん、
これ、私の知り合いからもらった紅茶なの
よかったら一緒に飲んでみない？
紅茶？　飲む飲む！
私紅茶ってあんまり飲んだことないから楽しみかも
じゃあ、用意するね
その言葉は嘘ではありません。
何故ならそれは知り合い（の占い師さん）からもらった
（二人の仲を飛躍的に進めるための）紅茶だったからです。
はい、どうぞ
ありがと

それから二人で部屋に戻りましたが、
特に何も起きません。
ひょっとしたら占い師さんがくれたのは媚薬か何かで、
突然ベッドに押し倒される…
なんてことを期待していたのですが…
押し倒されるどころか、
加奈ちゃんは今日一日私と一緒に騒いで疲れたのか
ちょっと布団に横になるとすぐに寝息を立ててしまい、
そして私も急に今日の疲れを感じて、
同じように布団に横たわってしまいました。

数時間後

理央………きて、起きて…理央！

……んー……加奈ちゃん？

あれ、どこにいるの？

ここだよ！　ここ！

そこにいたのは——

理央、どうしよう…
私体が縮んじゃった！
小さくなった加奈ちゃんでした。

うう、どうしよう…なんでこんなことに…
ほんとに縮んじゃってる……
これもしかして、あの紅茶の…？
理央、なんでかわかる……？
ううん、全然…
(本当は、心当たりがないわけじゃないけど…)
……ねえ加奈ちゃん
今日はもう遅いし、とりあえず考えるのは明日にしない？
……そう、だね
こんなの普通あり得ないし多分夢かなんかでしょ！
寝て起きたらきっと戻ってるよね？
う、うん。そうだよきっと！
(よかった、加奈ちゃんが細かいことにこだわらない人で…)

あ…私、シャワーどうしよう……
この体じゃ今日は無理だよね……
!?
私が洗ってあげるから、今日は一緒に入らない!?
え、でも悪いよ
ううん、私もお風呂の使い方とか教えてもらいたいし！
ね？ お願い！
……そうだよね、じゃあ理央、悪いんだけど
ちょっとお風呂まで連れてってくれる？
下りて右手のほうだから

私は裸の加奈ちゃんを手に乗せてお風呂まで行き、
そこでシャワーの使い方やバスタオルの場所などを
教えてもらった後、自分も服を脱いでお風呂に入りました。
加奈ちゃんに裸を見られるのはとっても恥ずかしかったのですが、
それよりも目の前に好きな人が裸でいるという事実で
私の頭はいっぱいでした。
そして、とうとう私が
加奈ちゃんの体を洗ってあげる番になります。

はい、じゃあこっち向いて
うん……
なんかごめんね理央、色々面倒かけちゃって
カポーンッ
そんなこと気にしなくていいよ
(多分悪いのは私だし…)
じゃあ、泡つけてくね

ガシッ

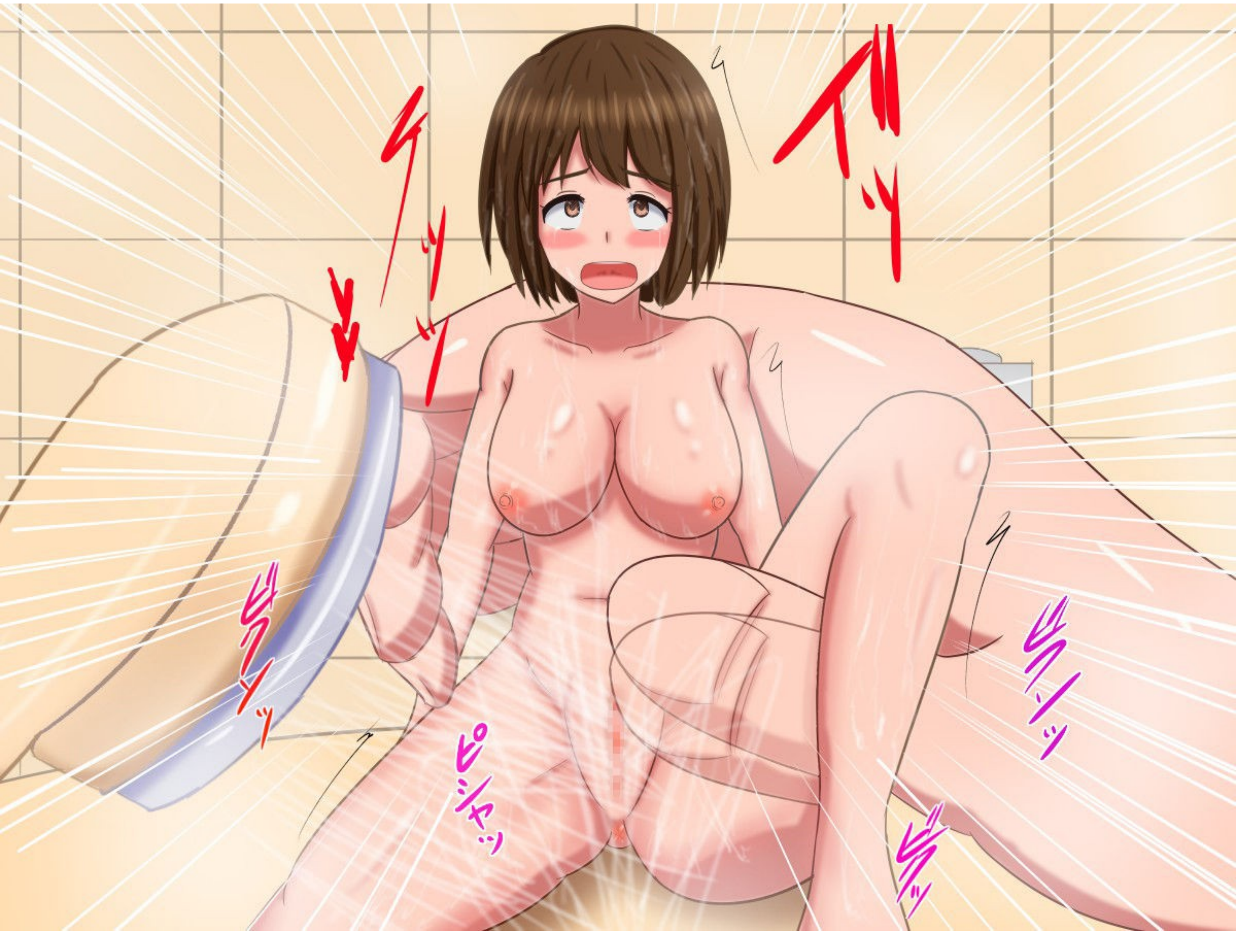
え、ちょっといいよ理央！
前は自分でやるから
はあはあ…
遠慮しないで！
ひやっ
え、ちょっ、やっ、くすぐったいから
やめて、理央、理央ー

ごしごしと優しく加奈ちゃんの体を洗いながら
私は自分の中に
不思議な感情が芽生えているのに気づきます。
私より可愛くて、私よりなんでもできた加奈ちゃん。
ワシャ
あっ…
ちょっ…
ワシャ
そんな彼女が
今はシャワーすら一人で浴びられなくて、
しかも私がこんな風に体を触っても
抵抗のひとつもできない……
あっ！

え、今の声…
あ、ううん！
ごめん、なんでもないから……
………
（嘘だ、今私の手がアソコに当たって……）
ビクンッ
じゃあシャワーで流すね？
う、うん…

ひゃっ、んんっ……
あ、やめっ、そんなとこ…っ！
理央…ダメだってやめて！
ほんとひっ、あっ…ダメ、あっ、あっ
んっ……
ビクンッ
コスコス
ひっやっ
んっ…
あっ…
シャアアア

待って理央、ほんとに、ダメだから
もう、やめっ
あ…あっ、くっ、イっ……
ひっやっ
んっ…
あっ…
コスコス
ビクンッ
シャアアア


ビクンッ
ピシャッ
ビクンッ
ビクッ

はっ、はっ……
大丈夫？
……うん、ありが……と
ハァ
ハァ
トプッ
息も絶え絶えという感じで加奈ちゃんはそう答ました。
私のしたことに対して文句の一つも言わなかったのは、
それがわざとではないと思ったのかもしれないし、
あるいは……私のこの湧き上がる衝動に気づいて、
これ以上私を刺激しないように努めたからかもしれません。

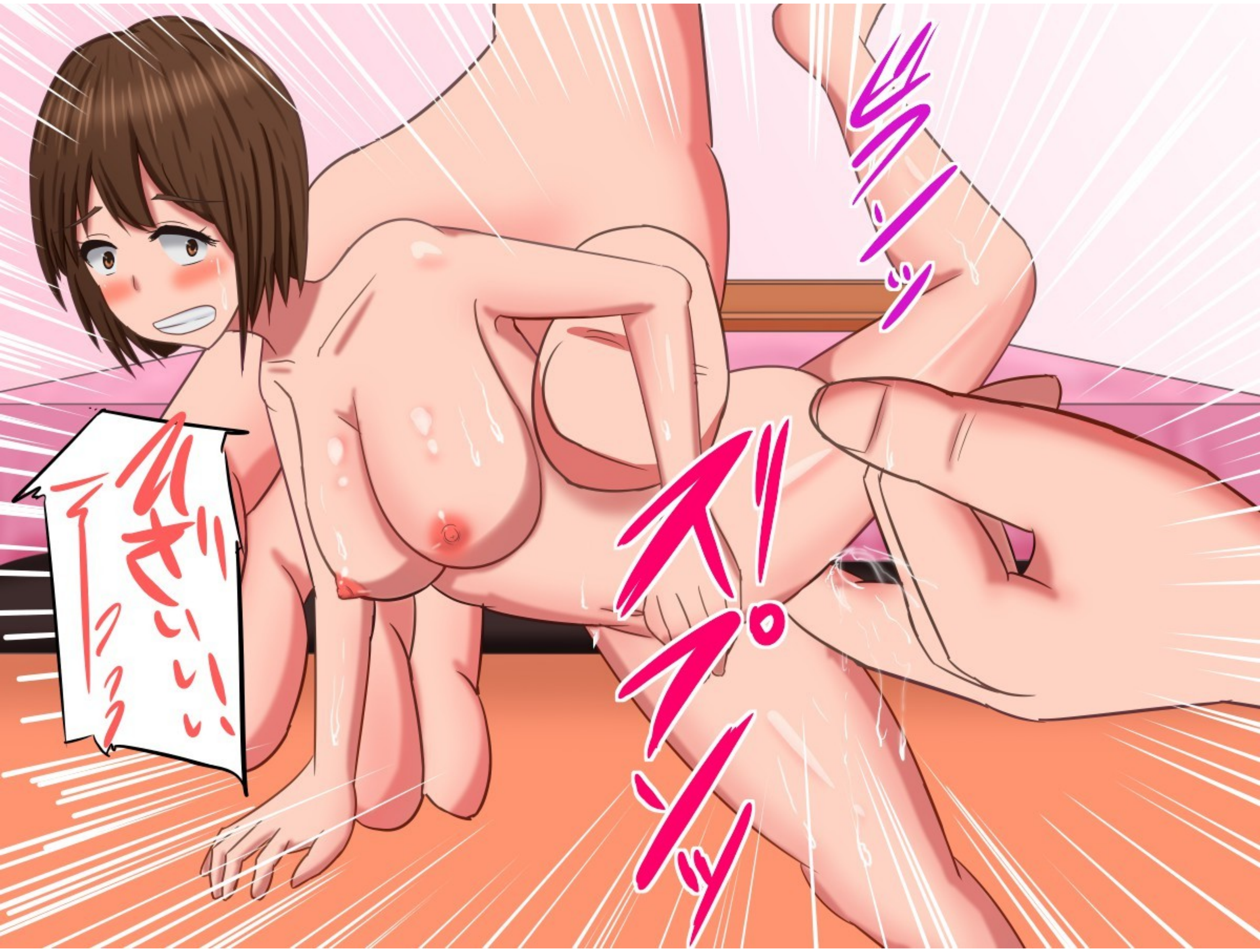
それから、私たちは部屋に戻りました。
気まずい沈黙……。
いえ、多分気まずいと思っているのは加奈ちゃんだけです。
お風呂の火照りとは明らかに違う体温の上昇。
これもあの占い師さんにもらった紅茶のせいなのかもしれません…
だったらもう、　いいよね？
私は加奈ちゃんの前に立つと、
彼女の衣服代わりにしていたハンカチをはぎ取り
荒い息でそのきれいな体を摘まみ上げました。

ねえちょっと理央!?
なにやってるの、怖いよ下ろして！
はあ、はあ…
加奈ちゃん、ごめんね
私、加奈ちゃんのことがずっと好きだったの
あの紅茶もね、知り合いの占い師さんに
加奈ちゃんと仲良くなれるよって
言われてもらったものだったの
まさか、小さくなっちゃうとは思わなかったけど…
理央、何言ってるの？

それにね、あの紅茶を飲んでから
私もちょっとおかしいの…
加奈ちゃんを好きって気持ちが抑えきれなくて、
なんだかこうしてイタズラしたくなっちゃうの……
ねえ理央、わかったから。とりあえず話し合おう？
ね？一旦私を下ろして、それで落ち着いて考えよう？

加奈ちゃん
さっきのシャワー、加奈ちゃんの体がぬるぬるしてたのは、
石鹸のせいだけじゃないよね…？
え、いや……それは……
こういうことだよね？
ちゅぷん
あっ…
ビグンッ

ひっー！！
ちょっと待って理央、それはほんとにダメだからっ！
でも加奈ちゃん、やっぱりここ濡れてるよ？
加奈ちゃんも、もしかして私のこと……
それは、さっきのシャワーのせいでッ…
グリッ
グリッ
ひっ…
ビクッ


ビクンッ
ズプンッ
んぎいいい!!
ァーッッッ

は、入っちゃった……
うっ、理……央……やめ……
もう…変にっ……
加奈ちゃん、もっと気持ちよく
してあげるね？
ビクッ
トロ～

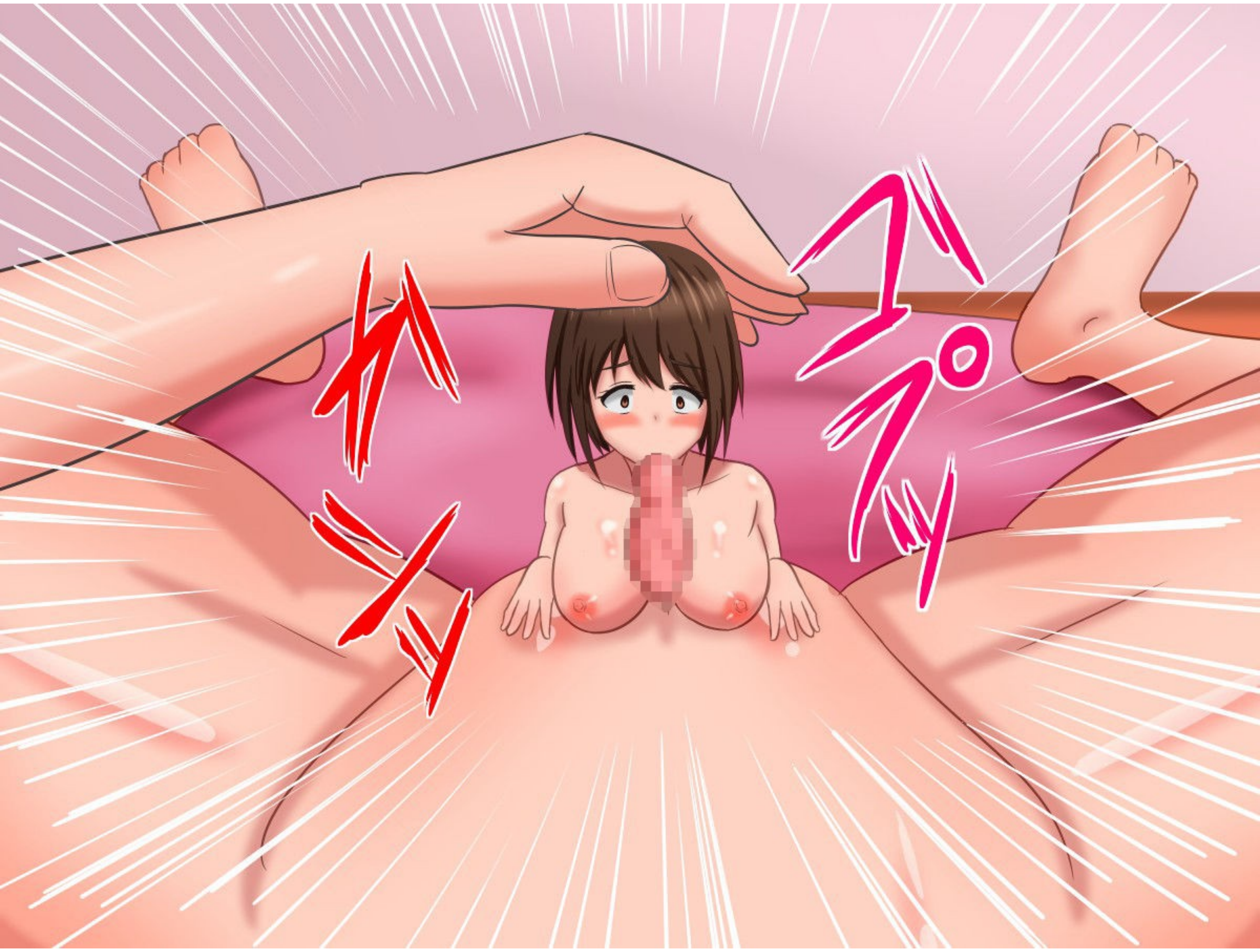
はっ、あっ、ぁぐっ…
あはは、加奈ちゃん可愛い
やっぱり加奈ちゃんも私のことを
好きでいてくれたんだね
だってこんなに私のこと
受け入れてくれてるんだもん
ジュポッ
ズブッ
お゛っ
お゛っ

イ゛ッ
ビチャ
プシャ

すごい……
ねえ加奈ちゃん？
今度は私も気持ちよくしてほしいな
トロ・・
……えっ？
フッ
フッ
ハァ
ハァ

ねえ、理央
もうやめよう？
こんなこと……ね？
ほら、どうせこれも夢なんでしょ？
だからこの辺で終わりにしとこうよ……
どうせ夢なら、私は最後までしたいよ
………
ほら見て、さっき気づいたんだけど――

!?
すごいでしょ？
これも紅茶の効果なのかな？
まるで男の子のアレみたいだよね
ムッ
ねえ、加奈ちゃん
これ…加奈ちゃんの口で気持ち良くして？
ショキッ
何言ってるの理央…、正気に戻ってよ


ゴプッ
ガシッ

ぐぽっ、ごぽっ……うげっ
ぐぼっ…
あっ、んっ、すごい…
加奈ちゃんの口の中あったかくて
ヌルヌルで……
クリトリス、感じちゃうぅっ
あぐっ、ごっ、おっ…

はぁ、これすごい…
加奈ちゃん大好き
ごめん、なんか出ちゃうかも……あっ
あっ、出っ——
おっ
おっ

プシャッ

けほっけほっ
理央、もう、これで……
満足……したでしょ？
ハァハァ
ピシャッ
はぁはぁ……ねえ加奈ちゃん……
ほんとにシちゃおっか……最後まで
これ、加奈ちゃんの中に入れちゃお？
そん……な……

私は暴れる加奈ちゃんを無理やり押さえつけ
さっきよりもさらに大きくなったクリトリスにあてがいます。
加奈ちゃんは、はぁはぁと大きく息を吐きながら
声を上げますが、私の耳には入りません。
ただ加奈ちゃんと一つになりたい。
加奈ちゃんを直接感じたい。
その思いだけが体を支配していました。

待って理央！
それは、無理だから！
絶対おかしいって、入らないよ！
口でならいくらでもするからそれだけは許して！
じゃあ、挿れちゃうね
一緒に気持ちよくなろう？

ズブッ

あ、お腹……がっ
げほっ、くるしっ……
あっ……すっごい……加奈ちゃん
ものすごい締め付けられる
これ、こすったりしたら、ほんとに……
私の形、加奈ちゃんにしっかり覚えさせてあげるね
ハッ
ハッ
ぐりっ…
あっ…
がっ…
ヂュ
ズリチッ

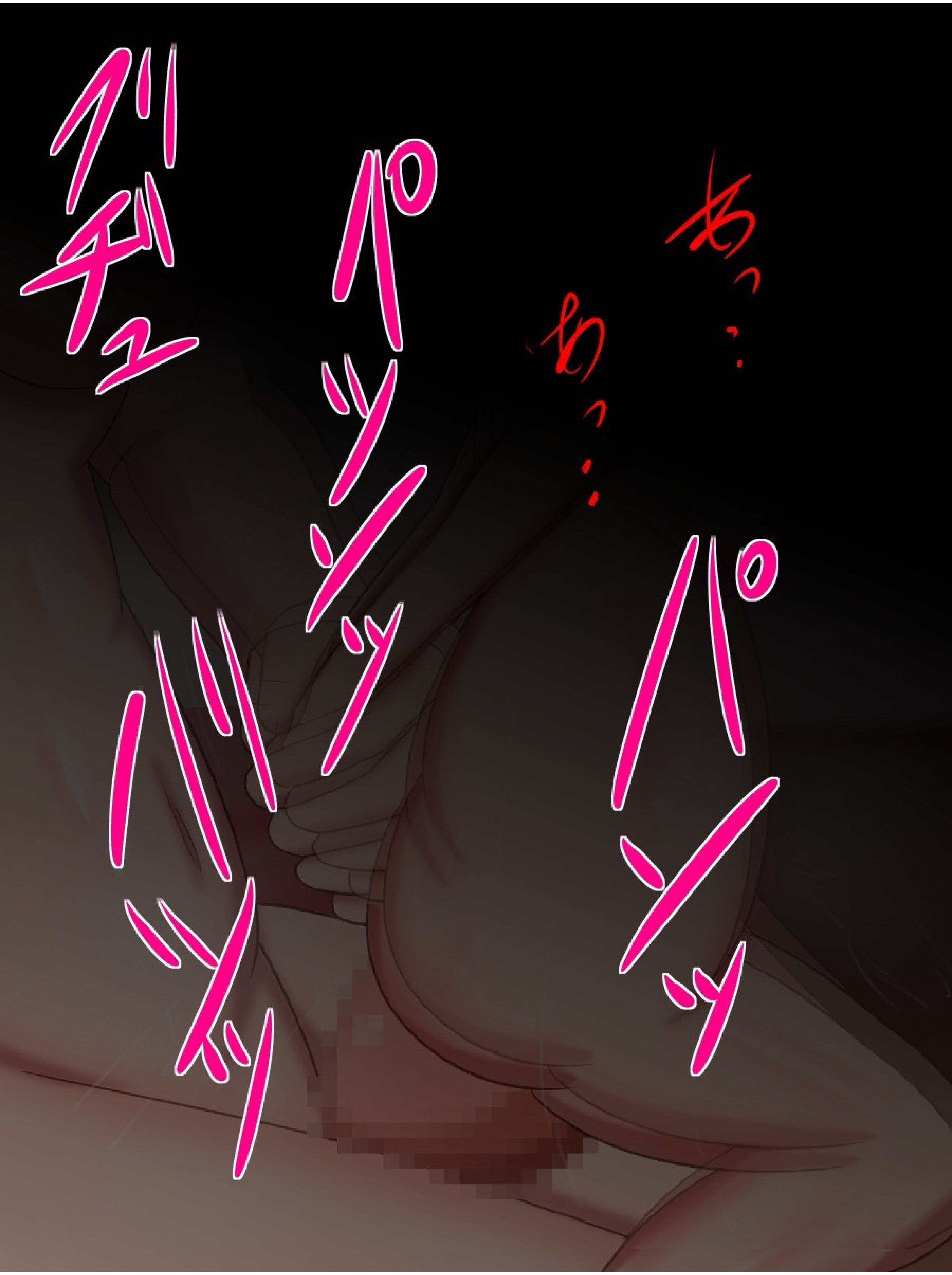
ズチュ
お゛っわ゛ッ
バチュン
ズブッ

加奈ちゃん！ 加奈ちゃん！
私たち一つになってるよ！
大好き、加奈ちゃん！
もうイク！ イっちゃう、 一緒にイこう！
イクよ、イクッ、イっ！
おっ
わッ
バチュン
ズブブッ

ビクンッ
ビクッ
ビクッ

あっ・・
あっ・・・
はひっ・・・
ビグッ

それから私たちは二人きりの一週間、
何度も何度も愛し合いました。
私が加奈ちゃんの愛を感じるたび、
私のクリトリスはどんどん大きく硬くなり、
加奈ちゃんもまた、 私の愛を受け入れ続けてくれました。



あっ…
あっ…
パンッ
パツンッ
バツッ
グヂュ

あはは、すごいね。一週間でこんなに大きくなっちゃった
もう加奈ちゃんのお腹も完全に私の形になっちゃったね
もう私なしじゃ動くこともできないもんね
わっ…ハッ
あっ…ハッ
パンッ
パンッ
グッッ
パチュ
でも大丈夫だよ、私ずっと加奈ちゃんと一緒にいるから！
あ、加奈ちゃんビクビクしてる。またイっちゃうの？
いいよ、一緒にイこ？
気持ちよくなっちゃお？ ほらっ！

ビグッ
ビグンッ

はあ、はあ
これで今日何回目かな…？
一日中してるからもうわかんなくなっちゃった
そういえば、明日加奈ちゃんのお母さんたち帰ってきちゃうね
どうしよっか？ 加奈ちゃん今度はうちに泊まりに来ない？
あっ、あっ……
ほんとに？ よかった！
じゃあお母さんたちにも言っておくね

私と結ばれた喜びで、
ほとんど言葉もしゃべらなくなった加奈ちゃん。
でも大丈夫、だって私たちは言葉なんかなくても、
心で通じ合えているんだから。
これからもずっと一緒だよ？
ね？ 加奈ちゃん？
FIN